

佳作

この仲間と最後まで

岩手県盛岡市立黒石野中学校

3年 伊藤 風希

ボールが弧を描いて相手チームのコートに落ちた瞬間、私たちのチームの得点になった。仲間の笑顔、体育館に響く拍手、そのすべてが、「やめない」と決めたあの時の自分の心に染みた。

私はクラブチームでバレーボールをしている。ポジションはレフトだ。去年の12月、「もっとうまくなりたい」という思いから、このチームに入った。初めての練習はとても緊張したけれど、今思えばあの日が私にとっての「チャレンジの始まり」だったのだと思う。

練習は想像以上に厳しかった。走り込み、基礎練習、声出し、何本も続けてスパイクやレシーブをするメニュー。毎回汗だくになり、体力も限界だった。

「なんでこんなにキツイの……」「もうやめたい……」そう思ったことは、一度や二度ではなかった。そんな時、声をかけてくれたのは、同じチームの仲間だった。ある日、ついに「やめたい」と口に出してしまった私に、仲間はまっすぐな目でこう言ってくれた。

「風希がこのチームには必要だよ」

その言葉は、今でも忘れられない。私なんかいなくてもいいんじゃないかと悩んでいた私の心に、その一言は大きく響いた。

「ここでやめたらきっと一生後悔する。最後の大会を、この仲間たちと一緒に終えたい」

それからは、どんなにつらくても、前を向いて練習に取り組んだ。苦手なレシーブも自主練をしたり、コーチにアドバイスを求めたりして、少しでもできるようになろうと努力した。「失敗してもいい。とにかく、今できることをやり切ろう」そんな気持ちが、私の中に少しずつ根付いていった。

バレーボールは、一人ではできないスポーツだ。トスがなければスパイクは打てないし、レシーブがなければ試合は始まらない。チーム全員がそれぞれの役割を果たして初めて、一つの得点になる。だからこそ、仲間との信頼関係がとても大切だ。けれど、それは短い時間でつくれるものではない。何度も失敗し、時には意見がぶつかることもある。それでも私たちは、練習での声掛け、試合中の励まし合い、そして小さな成功を分かち合うことで信頼を積み重ねてきた。

思えば、私にとって「チャレンジ」とは、単に試合で勝つことではなかった。

うまくできない自分と向き合い、それでも一歩踏み出し続けること、その過程で仲間と支え合い、成長を分かち合うこと、それが本当のチャレンジなのだと今は思う。チャレンジとは、結果だけでなく、そこに向かう道のりも含むものなのだ。努力してもすぐに成果が出ないこともある。失敗や悔しさで心が折れそうになることもある。それでも「やめない」と決めて進むこと自体が、大きな価値となる。

この経験を通して、私はチャレンジが人を変える力を持っていることを知った。挑戦を続ける中で、自分の弱さも知ったし、同時にそれを乗り越える勇気も手に入れた。

将来、私はスポーツに関わる仕事に就きたいと考えている。プレーヤーとしてもっと上を目指しながら、それが叶わなかったとしても、指導者やトレーナーのように、誰かの成長を支える立場を目指してみたいと思う。今クラブチームで積み重ねている経験は、私にとって夢に近づくための大きな一歩だ。これからも高い目標を持って、どんな壁にも立ち向かっていきたい。つらい練習も、思うようにいかない試合も、すべてが自分を成長させてくれるチャンスだ。これからも「挑戦する心」を大切にして、もっともっと強くなりたい。そしていつか私の背中を見た誰かが「私もチャレンジしてみよう」と思ってくれたら——それが私の次の夢になるかもしれない。